

軍艦島にみるまちづくりの視点

「軍艦島上陸客、解禁1年で59,000人。」先日の新聞の見出しですが、昨春から一般の上陸を解禁した、長崎市沖に浮かぶ「端島」(通称・軍艦島)は、「朽ち果てた街を見るだけ」という観光形態で人気を呼んでいます。

採炭のために造られたこの人工島は、明治時代には本格的な海底炭鉱として操業し、大正時代にして日本最古の鉄筋コンクリート造高層集合住宅の建築、昭和に入ってから日本最古の海底水道の建設、そして、世界最高の人口密度を誇った「超近未来都市」として栄華を極めながらも、昭和49年の炭鉱閉山とともに無人島となり、現在は廃墟となっています。

全ての時間が止まったかのようなその姿は、宮崎アニメの「天空の城ラピュタ」を彷彿させるものですが、日本の近代化を夢見て造られた島の成れの果ては、皮肉にも、「近代日本の過剰消費の縮図」、現代に警鐘をならす存在として、国内だけではなく海外からも注目を集めているそうです。

しかしながら、何から何まで人工的なこの都市に、確かに人が住み暮らしていた名残だと感じられる、温かな空間が存在したことをご存知でしょうか？実は、明治43年頃に造られた日本最古となる屋上庭園を始めとして、島内の建物には、人々が土を本土から運んでまでして自発的に造った屋上庭園が存在したのです。

一れについて、私は、島に住む人々が「住み心地のよさ」を求めた表れではないかと考え、とても興味深いものだと思います。島で暮らすにあたって、人工的な都市環境の中に慣れ親しんだ土のある自然を求める、という行為の結果であり、多くの人々がこの屋上庭園に「住み心地の良さ」を見出したことから、この取組が島全体に広がっていったのではないかと私は思うのです。

さて、それぞれの地域に応じた独自かつ協働のまちづくりが求められている現代、私たちの三浦市では、『住み心地のよいまち』を目指して様々な取組を行っています。100年も前の人工島において生み出された屋上庭園の例が、豊かな自然環境に恵まれた三浦市において現在取り組んでいるまちづくりと、本質的に符合していることは、とても不思議であると同時に、まちづくりの意味、仕事への姿勢を改めて考えさせられます。

軍艦島の例は、人工的な環境に自然を求めるという、人間の本能的な感情から生まれた取組であり、多くの人が賛同したものと考えられますが、「住み心地のよさ」とは人それぞれに感じ方が違うという一面もあります。私たち行政には、住民一人ひとりの求める「住み心地のよさ」を尊重すると同時に、その最大公約数を求めるだけではなく、より三浦らしいまちとするために必要な「住み心地のよさ」を見極めることが求められるのではないのでしょうか。また、実際の施策の担い手である職員として、私は、求められる「住み心地のよさ」に気付く意識を持つとともに、その是非を判断するためにも、幅広い知識の習得に積極的に努めなければと思います。



として、私は、求められる「住み心地のよさ」に気付く意識を持つとともに、その是非を判断するためにも、幅広い知識の習得に積極的に努めなければと思います。

(秘書課 山下 明恵)

暴論オピニオン (36)

三浦市政策経営課では、行政経営全般について日頃から様々な無責任放談をしています。このコーナーではその放談の中で飛び出した暴論をご紹介します。両手を挙げて賛成できないまでも発想のヒントくらいにはなるでしょう。

ローカルルール

みなさんは、これはローカルルールだなと感じたことはないだろうか。

筆者がこれから述べるローカルルールとは、最広義のローカルルールである。例えば日常生活においても住んでいる地域ごとに存在するようなルール。もっと言えばわれわれ市役所の職員はもちろん会社等にお勤めの方も、人事異動の都度、部署ごとに様々なルールがあることを感じているであろう、あのルールである。

ローカルルールは確かに、その限られた範囲において合理性を有している場合は有用であり守られるべきであることは明らかである。ところが、日常での慣れなどに基づいた結果として、そのローカルルールに問題があることに気付かないか又は気付いているのに見過ごしている場合まで守られるべきであろうか。法的に問題があるものはもちろんであるが、それ以外でも、問題があると考えられるローカルルールは解消すべきである。

ところが、自身の経験から言えば往々にしてローカルルールは粛々と残り続けることが多いと感じている。そこで、気付かない場合はともかくとしても、問題があると気付いているのにあえて見過ごされ続ける場合について考察してみたい。

あえて見過ごす場合というのは、どのような状況が考えられるであろうか。

最も考えられるケースが、そのローカルルールが通用している範囲内において、波風を立てたくないという意識を持っているためではないか。自身にとって、よほどそのローカルルールの存在が疎ましい状態にでもなればまだしも、わざわざ異議を唱えて、場合によっては嫌われ者になってしまうような行為に及ぶ必要がない。と考えるのが通常であろう。

しかし、である。考えてみてほしい。確かに悪法もまた法なり、ではあるが、悪貨は良貨を駆逐する、のである。

見過ごすという慣習や文化こそが、良い方向への変化を進めようとする良貨を、駆逐する悪貨だと考えられないだろうか。

「変わるにはエネルギーが必要だ。多少の不都合であれば我慢をして、日常に埋没し、淡々と日々を過ごすほうが楽に決まっているし、みんなで仲良くやればよい。」こんな考え方に捉われてはいないだろうか。

それこそが、悪しき慣習や文化そのものである。悪しき慣習や文化を変えることができるのは、ほかでもない、問題のあるローカルルールに気付いた自分自身なのである。

勇気を持って嫌われ者になろうではないか。そうして変えていくしか道はない。ローカルルールごときで、と思われた方も居るだろう。しかし、一事は万事に通ずるのである。三浦市が標榜している高効率な市役所となるためには、このような、小さな問題だと考えられがちであるが実は根源的な問題を、一つ一つ解消していくことが求められているのである。

変えるためのエネルギーは、状況次第では莫大なものが求められるかもしれないし、場合によっては、ひとりの力では変えることができず疲弊してしまうことがあるかもしれない。しかし、正しいことを行おうとする芽が摘まれ続けることは絶対ないと、期待をこめつつ願い、嫌われ者になることを決して厭わない自分になりたいと考える。

「ぼっこすこせえる」とは・・・ 神奈川県三浦市には三崎弁と呼ばれる方言があります。「ぼっこす」は「ぶち壊す」の意味、「こせえる」は「こしらえる」という意味です。つまり、「ぼっこすこせえる」は「ぶち壊し、こしらえる」=スクラップ&ビルドという意味になります。

次号(第47号)は6月17日発行です。



3S市長の経営視点

三浦市長の吉田ひでおです。今年11月には横浜でAPEC（アジア太平洋経済協力）首脳会議が開かれます。この開催は経済波及などの計り知れない効果をもたらしますが、一方でテロ行為などの発生が懸念されています。

そのような危機を未然に防ぐためにも、地域と警察が密接な連携を図る必要があります。市もメンバーとして参加する形で「三崎警察署地域安全協力会」が発足し、先月には不測の事態の未然防止と危機発生時を想定した訓練を行いました。テロの脅威は強大ですが、決して諦めてはいけません。「塊より始めよ」という言葉もあるように、大きな事を成すには、身近なところから準備を始めることが肝要です。

これは特別な時だけではなく、日常の中でこそ、忘れてはならないことだと思います。職員一人ひとりの力は僅かなものかもしれませんが、組織として取り組むことが大きな力となり、さらに市民の協力も得られれば、不可能も可能となるほどの計り知れない力が生まれます。どんな難題でも「NO」と言ってしまうと、そこで終わりです。なんの力も生み出しません。

非常に厳しい財政状況の下で三浦市の平成22年度がスタートしましたが、財政状況を言い訳にせず「YES」からのスタートで、職員一丸となって全力で邁進していきたいと思っております。